

「人類進化の研究者は博物館で何をしているのか」

馬場 悠 男 昭和 38 年卒業（新 15 回生）、国立科学博物館名誉研究員

私は、動物大好き・工作大好き少年でした。中学のときに「ロンドンー東京 5 万キロ」という本を読んで、大自然や古代文明遺跡を訪ねる旅に憧れ、外国に調査に行くという夢を持ちました。昭和 30 年代には、一般庶民は外国にはとても行けなかったのです。

高校のときは、目立たないオタクで、成績も普通でした。飛行機や建築にも興味を持って大いに悩みましたが、最終的に中学のときの夢を実現したくて、一浪して、何とか東大理 2 に受かり、人類学教室に進んで、人類進化の調査・研究を専門としました。初めは大学に就職しましたが、途中から国立科学博物館人類研究部に移りました。

博物館では、資料を集め、整理して保管し、未来へ継承するという仕事の基本です。その上で、専門誌に論文を書くという学術的業績を上げることが要求されます。社会還元として、展示を企画し、一般向け講座を開きます。また、雑誌や単行本の原稿を書き、テレビ番組を監修することもあります。でも、来館者に展示の解説をして、喜んでもらえたら、それこそ博物館員としての冥利に尽きます。

実際の調査や研究は、マニュアルがほとんどないので、自分で工夫して実行する必要があります。また、いわゆる「きつい・汚い・危険」の要素がありますので、デリケートな人には向かないでしょう。私は、論理・数学・ハイテクには弱く、典型的アナログ人間ですが、見て、触って、比べ、総合的に考えることは何とか自信があります。

人類進化の研究は、私たちの祖先がアフリカで誕生して現代日本人になるまでの人類史を知るこ

とですが、同時に、私たちの「人間らしさ」がどのように発達してきたかを知ることでもあります。それが、現在の私たちを理解し、未来の子孫のために何をすべきかを教えてくれるようです。

具体的には、たとえば、インドネシアでジャワ原人化石を発掘し、アジアにおける人類進化を研究してきました。その際に最も重要なのは、現地の研究者や調査地の人々との信頼できる人間関係です。お互いに対等の関係で仲良く付き合うと、やがて学術的な成果にもつながります。

自分の小学校の卒業式で、「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」と「気は長く、心は丸く、腹を立てず、人は大きく、己は小さく」という両極端の訓示を聞きました。それ以来、私は、その間を行き来し、それなりの努力で、運の良さもあって、「まあ、いいか、何とかなるだろう」と過ごしてきました。

最近、ある大学で人類進化の講義をしていて、1000 名以上の男子女子学生に、「来生で、生まれ変わりたい動物は何か、理由も示せ」というアンケート小試験を行いました。1 位が鳥で、大空を飛びたいというのは納得ですが、2 位と 3 位が猫と犬で、飼い主に可愛がられ、甘える自分の来世が見えるという結果になりました。

皆さんは、何に生まれ変わりたいですか。それは、何になりたいかでもあります。ちなみに、私自身は、血みどろのライオンにも、そのエサにもなりたくないで、アフリカの大草原を悠々と歩くゾウに生まれ変わりたいと思っています。

朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。今月は国立科学博物館名誉研究員の馬場先生からご寄稿いただきました。